

常磐津『松廻羽衣』

“松廻羽衣”とは、松の枝にかかっている羽衣のこと。  
羽衣は、鳥の羽でできていて、天女はそれを着て空中を舞うと言われる。

—歌詞—

かざはや  
〴風早の  
みほ うらわ こぐふね  
三保の浦曲を漕ぐ舟の  
うらびと さわ なみじ  
浦人騒ぐ波路かな

伯龍「これはこのあたりに住む

はくりょう  
伯龍と申す  
ぎよふ そうろう  
漁夫にて候」

げ  
〴実ののどかなる朝霞  
よも  
四方の景色を見渡せば  
あれなる松に美しき  
ころも  
衣掛かれり  
いざや取りてわが家へ帰らん

天女「のうのう

それこそは羽衣とて  
たやすく人に  
あと  
与うべきものにあらず  
かえ たま  
返させ給え  
返させ給え のう」

〴吹く春風に誘い来る  
姿を三保の松原や  
すそ  
霞に裾は隠せども  
しろたえ ふじ  
まだ白妙の富士の顔

—解説—

風が強い様子。

海岸を廻って舟を漕いで、  
漁夫が意気揚々と漁をする。

◆振◆ 伯龍の登場。竿を持っている。

「私はこのあたりに住んでいる伯龍という  
名前の漁師です」という自己紹介。

→能の様式【名乗り】

景色を見渡していると、松に美しい衣が掛か  
っている。あれを家に持って帰ろう。

(呼びかけの言葉)

「それは羽衣で、人間のものではありません。  
返していただきませんか。」

◆振◆ 天女の登場。

天女が、春風と共にあらわれ、三保の松原に  
姿を現す。

霞のかかった富士山に、まだ雪が残っている  
様子と、天女の美しい白い顔の両方の意味が  
込められている。

伯龍「さては天女に  
ましますかや  
よきもの得たり」

〴と うち喜び  
返す景色もなかりける

〴今はさながら天人も  
羽なき鳥の如くにて

〴飛行の道も絶えぬると  
かざしの花もうちしおれ

五衰の姿あらわれて

露の玉散るばかりなり

〴伯龍はそれと見て  
いかにもあまり御痛わし  
されども衣を返しなば  
そのまま天にや昇るらん

〴いやとよ 我も天乙女

たとえ世界は変わるとも

慕う心はただ一筋に  
思い染めにし恋衣

「あなたはもしかして天女ですか。いいものを得た。」と喜んで、羽衣を返す様子はない。

◆振◆ シフリという能の型で、泣く様子を表現している。

羽衣がないと天人も、羽のない鳥のよう。

「かざしの花」とは、天女が頭に飾っている花のこと。それがしおれてきていること。

「五衰」とは、天女も臨終のときに現れるという五つの衰えの相。

- ① 身に着けている衣服が垢で穢れる。
- ② 頭につけている花がしおれる。
- ③ わきの下から汗が流れる。
- ④ 身体が臭くなる。
- ⑤ 天女であることが億劫になる。  
などの諸説がある。

露が落ちるように、はかなく命が消えていくと天女は感じている。

伯龍はそれを見て、とても可愛そうと思うけど、今この衣を返したら、そのまま天に帰ってしまうだろうと疑っている。

いやとよ=否とよ。伯龍の言葉への否定。  
いいえ、私は天乙女です。

例え天界と人間界が変わることがあっても、天乙女ですから、そんなことはしません。

◆振◆ 心に手をあて、天女が羽衣を一心に想う様子を表現している。

契り結ばん女夫松

女夫松＝夫婦のように並んだ二本の松。  
小松に子供の意味がかけてある。

やがて小松の色添えて

夫婦になって、やがて子供をもうけて。

夢かうつつか 疑わしくも

独り淋しき手枕に

◆振◆ 初めて伯龍と天女が男女として近づく場面である。

妹背を渡す 鶺鴒の

妹＝女、背＝男、  
鶺鴒＝織女と牽牛が七夕で会うとき、天の川に翼をかける鶺鴒の橋のこと。

天津乙女を我が妻と  
睦み合うのを楽しみに

天女と伯龍を、織女と牽牛に見立てて、天の川ではなく、天と地の間に橋をかけることを言っている。

賤が手業もまだ白波の

天女を自分の妻として愛し合う。

寄する渚に 千代かけて

漁夫の妻としての仕事はまだ知らないという天女の気持ち。

変わらぬ松の深みどり

愛情が寄せてくる。  
深い愛が松の緑のように続くこと。

心の丈を推してと

二人の間には、たしかな愛があるけれども、天女だから羽衣も大事だという、せつなく複雑な心情を察してくださいと、何とも言えない眼差しで伯龍にうったえかける様子。

いとも床しきその風情

(伯龍は、その心を察したのだろう…)

へさあらばかねて聞き及ぶ

天女の舞を今ここで  
奏で給えとすすむるにぞ

そうしたら、かねてから聞いていた天女の舞を今ここで舞ってくださいと伯龍がお願いをする様子。

おとめ ころも  
乙女は衣着なしつつ  
あづま するがまい  
かりに吾妻の駿河舞

合

い思いは胸にうちよする  
つづみ  
波の鼓のそれならで  
こくう  
虚空にひびく音楽に

合

げいしょうう い かな  
霓裳羽衣の一と奏で

うるお  
雨に潤う花の顔

れんり えだ ひよく とり  
連理の枝に比翼の鳥

うらや  
つばさ交わして羨まし

おもしろ  
面白や

たえ かお  
妙なる薫り 花ふりて

乙女は返してもらった羽衣を着て、  
天女の舞を舞うの意味。

間奏の部分。

◆振◆ ここで天女は、羽衣を着て瓔珞ようらくを付け、天女の姿になる。

踊りで身に着ける羽衣は、長絹ちょうけんという衣裳である。

◆振◆ 中啓ちゅうけいという小道具を持って再登場。  
三保の松を愛で、波騒の音の中、天女が舞う。

◆振◆ ここで天女は鞆鼓かつこという小道具を付けて登場。

げいしょう  
霓裳 = 虹のように美しい裳。  
羽衣 = 鳥の羽のように軽い衣。

ここでは、霓裳羽衣という月宮殿のことをうたった曲のこと。

天女の顔が、雨にぬれた花のようにみずみずしく美しい様。

夫婦の仲がいい事を言っている。  
伯龍と天女は、嘘のない関係であったことをにおわしている。

連理の枝 = 二本の樹の枝が交わりその木目が通じている。

比翼の鳥 = 二羽の鳥が翼をならべること。  
長恨歌から来ている。

天女が舞うと、有難い良い香りが花のように降り注いでいる様子。

天の羽衣吹きかえす  
風にじょう乗じてひらひらひら  
昇りゆくえ行方も白波に  
霞かすみいろど彩る乙女の姿  
しばしとどめてみほ三保の浦

〴〵しげれる松のときわづ常磐津の

〴〵波打ち寄するきしざわ岸沢の  
糸に残して伝えける  
糸に残して伝えける

◆振◆ 天女が羽衣をひるがえしながら、霞にまぎれて、五色の雲の中、天に向かって昇っていく情景を踊る。伯龍はその様子を地上からみている。

松廻羽衣は、常磐津という唄の種類であるため、それを愛でている。

岸沢という作曲者の名前を入れている。もともと長唄（作曲：杵屋喜三郎 後 五世勘五郎）と常磐津（作曲：八世岸沢式佐 後 古式部）との掛け合いであったのを、古式部が整理して、常磐津単独の曲にした。

※ この解説は、主に日本舞踊全集を参考にしており、この中での◆振◆の説明は、『花ノ本海による日本舞踊観賞会』での踊りに限ります。